

ロマンスと現代文明

吉村, 治郎

<https://doi.org/10.15017/252>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 24, pp.17-24, 1997-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン :

権利関係 :



ロマンスと現代文明

吉村治郎

Lawrence and Modern Civilization

Jiro Yoshimura

Lawrence criticizes in his works again and again the modern civilization, for, he thinks, it prevents us from leading a life worthy of man.

It is rationalism that makes the essence of the modern civilization. According to him, the rationalism distorts two kinds of relationships man makes with his surroundings. One is the human relationship between man and woman, man and man, woman and woman, parents and children. Among them, Lawrence says, the man-woman relationship is the most important and essential to human life. The other is the one between man and nature or cosmos. And it is the effects of the rationalism upon these two relationships that he treats earnestly in *Women in Love*, a novel which shows most clearly his attitude towards the modern civilization.

This paper is designed to study Lawrence's view of the modern civilization, by discussing the effects of the rationalism upon these two relationships as shown in *Women in Love*, referring to his other works as well.

1

ロレンスは炭坑夫 Arthur Lawrence を父とし、中産階級出身の女性 Lydia Beardsall を母として1885年に誕生した。父は仕事をよくする陽気な男であったが、酒好きであり家庭をかえりみない人だった。そのため、躰の厳しい清教徒的家庭で育った妻と衝突することもしばしばだったという。そんな夫に愛想をつかせた彼女は夫に向けるべき愛情を我が子に一心に注ぐことになる。中産階級出身で教養も豊かだった母は、息子を夫のような下層の炭坑夫にはさせたくない。できればいい教育を受けさせ、いい職業につけて社会の階段を一段でも上に登らせてやりたい、と念願するようになる。母の愛情と期待を一身に受けたロレンスは当初、中産階級特有のピューリタンの価値観を疑うこともなく期待に応えようとする。頭脳も明晰で、ノッティングガム大学での教員資格検定試験

も首席で合格する。

しかし、青年期を迎えた彼は、母の強大な影響力に自分が呪縛されていることに悩むようになる。何度か恋をするが、正常な人間関係が結べなかったのだ。こうした経験から生まれた小説が、彼を一躍有名にした *Sons and Lovers* (1913) である。エディプス・コンプレックスを克服し、いかにしてアイデンティティを確立するかがこの作品のテーマとなっている。以後、専ら人間関係のあり方をロレンス独自のやり方で探求することがロレンス文学の終生の重大なテーマの一つとなる。

ところで、当初この自伝的色彩の濃い作品で扱った母と子の葛藤を中心にした人間関係のドラマは極めて個人的問題と考えていたようだ。しかし、やがて、それだけではすまないことに気が始める。一見、個人的と思われていた問題が実は現代文明の本質そのものと深いかわりを持つ重

大な問題であることに気付く。ロレンスの目は次第に文明そのものに向けられるようになる。次の大作 *The Rainbow* (1915) においてロレンスが純粹に人間関係のみを扱うのではなく、文明の本質とからめながら人間関係を追求しているのはそうした意識の表われである。

以後、*The Rainbow* の姉妹篇である *Women in Love* (1920)、猥褻か芸術かで日本でもその翻訳書をめぐって裁判沙汰にまでなった *Lady Chatterley's Lover* (1927) といった代表的長篇をはじめとして、詩、評論、エッセイ、紀行文、そして、書簡に至るまで、現代文明はロレンス文学の最大の関心の的の一つとなる。そればかりか、妻フリーダと共に母国イギリスを出奔し、持病の肺疾患のため45歳でイタリアで客死するまで、メキシコ、オーストラリア、スペイン、ドイツなど世界各地を転々とした漂泊の後半生も、ロレンスの年来のテーマである現代文明の本質と決して無縁ではなく、深いかわりを持っている。ロレンスが、小説家、詩人、思想家、預言者とされると同時に、文明批評家と称されるのも故なきことではなく、彼の文学には、現代文明に対する強烈な意識が横溢しているからである。

では、ロレンスは現代文明をどのように理解し、意識していたのであろうか。また、現代文明は人間にどのような影響を与えていると考えていたのであろうか。小論の目的はそのような点を考察することにある。

2

ロレンスはその作品の中で現代文明をしばしば糾弾している。しかし、彼は文明の表面的な現象のみをあげつらっている訳ではない。彼が文明批評をする時は必ず現代文明の母胎たるヨーロッパ・キリスト教文明二千年の歴史を視野に入れた上で発言している。その意味で、ロレンスの文明観を知る上でも、また、ロレンスの文明批評の重さと深さを知る上でも、現代文明の起源と、その変遷を簡単に通観する必要がある。

現代文明の根幹にある精神は合理主義精神であるが、その原型となったものは中世における「科

学」である。「科学」即ち“science”とは「知る」という語源的意味を持つことからわかる通り、元来、広く認識法の一つを意味していた。現代のような、医学や科学技術に代表される専門化した狭い学問領域を示す言葉ではなかった。中世では感性的臆測や、神話や迷信によって自分を取り巻く世界と、その中の諸現象を説明していた。それに対して、もう一つ別の、理性的判断に基づいて世界と現象を合理的に説明したり理解しようとする認識法があり、その認識法が「科学」と呼ばれていた。そして、その科学の担い手は敬虔なクリスチャンたちだった。そして、彼等にとって「科学」すること、即ち、世界とその諸現象を合理的に解明することは、宇宙の創造者たる神の御業を明らかにすることであり、神を顕彰する聖なる仕事の意味を持っていた¹⁾。やがて、ルネサンスの到来を迎えて、中世の「科学」は大きく発展する。

ルネサンスは14世紀後半にイタリアに興り、16世紀初頭にかけて、ヨーロッパ全土に広がった一大思潮である。その第一の精神は人間中心主義である。ルネサンス以前の、宗教が支配的であった中世では、人間は神の導きがなければ、その生きえも全うすることができない不完全な存在と見なされていた。つまりヘブライズム的人間観が支配的であった。ところがルネサンスを契機として、この人間観は一変する。人間は不完全な存在ではなく、理性の光りと、あらゆる可能性を内に秘めた希望の存在と見なす、いわゆるヘレニズム的人間観が台頭する。ルネサンスによって人間は中世の桎梏から解放され、自由意志と精神の独立を獲得する。そして、人間は、もはや神を主人とするのではなく、自らが自らの主人となったのである。そして、こうした自由な気運の高まりに呼応して、理性的判断に基づく科学的精神が一層重視されるようになる。中世以来の「科学」、いいかえれば、合理的認識法がこの時期には広く社会に浸透し支配的となる。また一方では、科学的精神は様々な学問分野で応用され、実験と実践に基づく論証的諸科学の直接的原型が形づくられる。こうして、人間中心主義と合理的認識法という二つの精神を特徴とする現代文明の前身が産声を上げることに

なる。

やがて、これら二つの精神はロレンスが生きた19世紀には中正を失って偏向的傾向を帯び始める。宗教の力の衰退に比例して人間中心主義は、人間を万物の長とする不遜な人間至上主義へと変わり、合理主義精神は他の認識法を圧倒して唯一無二の全科玉条として君臨する。そして、キリスト教を母胎として生まれた合理主義精神は、ここに至って完全に宗教と訣別し、いわゆる「神なき合理主義」へと収斂していく。こうして、人間至上主義的合理精神を本質とする現代文明が成立する。

ロレンスはちょうど19世紀の「神なき合理主義」の時代から、それに続く20世紀初頭にかけて生きた人である。彼の鋭敏な直感は文明の歪みと欠陥を見逃さなかった。批判の対象は現代文明の本質をなす人間至上主義的合理精神であることはいうまでもない。もちろん彼は合理主義精神それ自体を全面的に否定するのではなく、合理主義精神を万能とする偏った傾向、もしくは、それに対する盲目的信奉を否定する。ところが、彼の見るところでは実際は、合理主義精神を受け容れるか否かという選択の余地はなかった。人は既にこの文明の害毒に、その自覚がないまでに麻痺した状態にあったのである。そこに彼は現代の悲劇的状況を見ていたといえる。彼はそうした麻痺状態を次のように述べている。“Ours is essentially a tragic age, so we refuse to take it tragically.”²⁾これは*Lady Chatterley's Lover*の冒頭を飾るあまりに有名な一節であるが、先に述べた文明に対するロレンスの悲観的認識をよく伝えている。

では、合理主義を本質とする現代文明は人間にどのような影響を与えるとロレンスは考えていたのか。次に合理主義精神と人間との関係を具体的に探ることとする。

3

小説の使命についてロレンスは次のように述べている。“The novel is a perfect medium for revealing to us the changing rainbow of our living relationships.”³⁾これから解る通り、ロレンス文学は「関

係」をテーマとする文学である。彼は人間が人間らしく生きる上で重大な意味を持つものとして二種類の「関係」を挙げている。一つは「人間関係」である。これは、男と女、男と男、女と女、そして親と子、の4つの関係から成る。このなかで彼は特に、男と女の間を重視している。残るもう一つの関係は、人間と、人間をとり巻く自然環境との関係である。人間と宇宙・自然との関係といってよい。こうした二種類の関係が正常に機能する時、彼の言葉を借りれば“living relationships”となる時、人はあたかも花の如く開花し、生の充足を得る、という。ところが、人間にとって生命的ともいえるこうした二種類の関係が現代文明にあっては危機に瀕していることを知る。その最大の元凶は、もちろん、現代文明の根幹をなす近代合理主義精神である。こうした危機感から生まれた強烈な文明断罪の書が、第五作目の長編小説*Women in Love*である。この小説では前作*The Rainbow*とは異なりロレンスの文明観が正面から打ち出されており、上述の二つの関係が現代文明とのかかわりを通して徹底的に究明されている。ロレンスの文明観を知る上で避けて通れない小説といえる。以下、主として、この小説を通してロレンスの考える現代文明の人間的意味を考えることとする。

Women in Love では二組の男女が重要な人物として登場するが、一番重要な意味を持つ人物はGerald Crichである。

Geraldは炭坑経営者の息子として登場する。父のThomasは博愛精神に基づいて炭坑を経営していた。坑夫たちが困った時には親身になって相談相手ともなり、時には経済的支援も惜しまなかった。従って、Thomasと坑夫たちとの間には単なる雇用主と使用人という機械的関係を越えた人間関係がある程度成立していた。またThomas自身、そうすることに自らの「存在理由」を見い出していた。

一方、父亡き後、経営を引き継いだGeraldは経営方針を一変させる。博愛精神に基づいた父の経営法を一掃し、徹底した合理化を推進する。合理化は彼自身も驚くほど上首尾だった。数年のうち

に会社は石炭を地下から奪い取る鋭利な機械組織そのものと化す。その順調さに、自らの中に神性が宿っているかのような錯覚にとられることもあった。しかし、合理化が完了し、たった一人何もしないでいる夕暮時など、恐ろしいほどの虚無感に襲われる。

一方、合理化に伴い Gerald と坑夫たちとの関係も一変する。坑夫たちは合理化により会社という組織の歯車の一つとされるが、Gerald 自身もその組織の機械の一部と化してしまう。坑夫との違いは彼が機械の司令塔となっている点のみである。しかし機械の一部であることに相違はない。そして、Gerald と坑夫たちを繋ぐものは、金谷氏の言葉を借りれば、金によって労働を売買する “money nexus” 「金銭的關係」だけであり、雇用者と使用人という “function nexus” 「役割分担的關係」だけである⁴⁾。いずれもメカニクな關係でしかなく、人に「存在理由」を感じさせるような「有機的關係」ではない。合理化完成後、Gerald を襲ういいよのない虚無感実はそのようなメカニクな人間關係のもたらしたものである。

人間は合理性を求めずにはおれない理性的存在であることは確かだ。しかし他方、理性と相反する感情や本能を備えた感性的存在でもある。そして表向きの大義名分はどうであれ人間を根底から衝き動かすものはむしろ感情や本能の方である。これらが満たされる時、よい意味でも悪い意味でも自らの「存在理由」、ロレンスの言葉を借りれば「生の充足」(fulfilment)を獲得する。従って、人間の持つこの感性的領域は理性的領域以上に、人が生きる上で無視できない重要な生命的側面だといえる。まわりとメカニクな人間關係しか結ぶことができない Gerald は、そうした感性的自己を解放することができない。それ故に、抑圧された彼の感性的自己は、夕暮れ時、彼が我に帰る時、不可解な虚無感となって彼に復讐するのである。

Gerald の合理的態度はその人生觀にもはっきりと窺われる。“In the Train” と題された章で、Gerald が友人 Birkin と話をする場面がある。Birkin が君の生の中心はどこにあるかと尋ねたのに対し、彼は次のように答える。

“I don't know – that's what I want somebody to tell me. As far as I can make out, it doesn't centre at all. It is artificially held together by the mechanism.”⁵⁾

この一節は機械的思考法しかできない Gerald は人生についても機械的見方しかできないこと物語っている。彼が信ずるのはメカニズムだけである。ここには機械的關係を越えた生きた關係を社会と結び、そこに積極的な生の意義を見い出そうとする姿勢はない。というより、彼はそれができないのだ。それが、機械的合理主義の宿命なのである。従って、彼は、人生において重要な意義を持つ筈の結婚も社会の伝統的儀式以上の意味を見いだすことはできず、従うべき社会のメカニズムの一環として考えるだけである。

こうした考えしかできない Gerald は、当然のことながら女性と正常な關係を結ぶことはできない。なぜならば、男と女の關係は本来、合理的領域に属する問題ではなく、むしろ、感性的領域の問題であるからだ。Gudrun との恋愛の失敗の原因は一部 Gudrun 側にもあるとはいえ、最大の原因は、彼が機械的人生觀しか持ち得ぬために、まわりの世界と不毛な機械的關係しか結ぶことができない所にある。優れた知性の持ち主 Gerald は合理主義の通用する事業の世界では神の如き力を發揮して成功をおさめる。しかし、全く不案内な感性的領域では赤子同然無力となる。Gudrun が「あなたは愛することができないのよ」⁶⁾ といっているように Gerald は彼女を愛する術を知らなかった。彼は愛するというより、むしろ、容赦なく襲う虚無感を埋めるため Gudrun を求めた。Gerald は不安に怯え泣き叫ぶ子であり、Gudrun はそれを慰める母となった。二人の内的關係は実は男と女の關係ではなく、母と子の關係でしかなかった。24 章 “Death and Love” の中で、ロレンスは二人のそうした内的關係を次のように描写している。

And she, she was the great bath of life, he worshipped her. Mother and substance of all life she was. And he, child and man, received of her and was made whole. His pure body was almost killed. But the miraculous, soft effluence of her breast suffused over him, over his seared, damaged brain, like a healing

lymph, like a soft, soothing flow of life itself, perfect as if he were bathed in the womb again. ⁷⁾

では、GudrunはGeraldのどこに魅了されていたのであろうか。

Gudrunは一応、芸術家ということになっているが、芸術に一生を捧げるつもりは毛頭なかった。といって他に彼女の心を捉えるものもなかった。実は彼女の心には何者をも冷ややかに見るシニシズムが巣食っていたからである。このため、どのようなことでも心から没頭できない。その名のGudrunが示す通り「良き走り」手だった。つまり、どこにも心を置くことができず絶えず走り続けている女性だった。彼女は自らを蝕むシニシズムのため現実の世界と出会うことができず、出口のない牢獄に閉じ込められもがいていたのである。そんな時Geraldに出会う。彼は彼女の目に次のように見える。“He was sheerly beautiful, he was a perfect instrument. To her mind, he was a pure, inhuman, almost superhuman instrument. His instrumentality appealed so strongly to her.”⁸⁾ 彼は、剛腕な実業家としての彼を支えている強靱な合理主義精神の完全な機械的道具と化していた。彼女はその機械的な強力な力にひかれたのだ。彼女の心の中では、その圧倒的力の前に跪きたいという女性特有の本能が、そして屈することによってその力を自由に操りたいという本能が頭を擡げる。彼女は牢獄から逃れ、自己を取り戻す機会を欲していた。そして、その解放の力をGeraldに見た、と錯覚する。しかし、Geraldもまた仮借ない合理主義精神によって深手を負った人間であった。彼女の望むような関係を結べないばかりか、彼女は却って、傷ついた彼を癒す道具とされてしまう。しかし、一方的犠牲を強いるような人間関係が長続きする筈はなかった。Gudrunは彼と知り合った当初は彼の強大な力に無抵抗のまま屈していたが、やがて自己を取り戻し、彼と訣別する。やがてGeraldは雪山をさまよい命を絶つ。彼を現実には繋ぎとめていた唯一の絆が断たれたからだ。

こうしてロレンスは、二人の愛の顛末を描くことにより、現代文明の合理主義精神がいかに関係を歪めるか、そして合理主義精神が人間関係

の中でいかに無残に敗北するかを純粋な形で物語っている。

4

前章ではロレンスが重視していた二つの関係のうち人間関係を検討したが、次に、残るもう一つの関係、人間と宇宙・自然との関係を考えることとする。

ロレンスは炭坑夫の息子として生まれ育ったこともあり、自然への関心は幼い頃から強かった。また、その小説は自然感が豊かなことも特徴の一つであるが、自然は単に小説の舞台を設定するための背景的道具として登場するのではない。いわば、主要な役割を担った一人物としての重みと役目を持っている。ここに自然に対するロレンス独自の認識が窺われる。つまり、かかわり次第では人間のあり方を大きく左右する重要な実体として位置付けられている。自然の延長としての宇宙についても同様である。

彼によると、人間と宇宙・自然とは無関係に別個に存在しているものではなく、両者はちょうど、月と海が呼応し合って潮の満干を生むように、互いに呼応し合う回路を形成しているという。それについてロレンスは次のように述べている。

There certainly does exist a subtle and complex sympathy, correspondence, between the plasm of the human body, which is identical with the human psyche, and the material elements outside. The primary human psyche is a complex plasm, which quivers, sense-conscious, in contact with the circumbient cosmos. Our plasmic psyche is radio-active, connecting with all things, and having first-knowledge of all things. ⁹⁾

“material elements outside”とは、人間をとり囲む外の世界、つまり自然界と考えてよい。そしてここで注意すべきは、自然との呼応は知性によるのではなく、人間の肉体によってなされるということである。ロレンスにとっては肉体やこれに宿る直観、本能等を媒介とした自然との結び付きこそが重要なのである。なぜならばそれは“first-knowledge”を与えてくれるからである。彼によると、古代人や異教の人々は宇宙や自然とのそのよ

うな交わりの中で生活していたという。ところが現代文明の中では、そのような肉体や本能によってのみ知り得る世界は否定されているという。したがって彼にいわせれば、現代人は宇宙や自然を喪失しているのである。

その原因としてロレンスは三つの要因を挙げている。一つは、人間が他の動物と異なり、知的存在であることに由来する。知性は本能や直観を抑圧するからである¹⁰⁾。もう一つはキリスト教である。キリスト教は霊肉二元論で人間を捉え、肉体に対する精神、いいかえれば理性の優位性を主張し、肉を罪悪視する宗教だからである¹¹⁾。しかし、これら二つの要因にもましてロレンスが執拗に弾劾するのは世界を席卷している現代キリスト教文明、いいかえれば、その本質をなす合理主義精神である。合理主義的思考に染まった現代人が自然に対して取る態度がどのようなものであるかは上述のGeraldを見れば明らかとなるであろう。

自然に対する彼の態度は作中では、石炭、馬、兎に対する接し方を通して描かれている。特に、石炭に対する彼の態度は自然に対する根本的な彼の姿勢を要約している。

父が亡くなり、自らが炭鉱経営にあたらねばならなくなった時Geraldは会社の状況を見るや否や、自分がなすべきことを次のように自覚する。

He had a fight to fight with Matter, with the earth and the coal it enclosed. This was the sole idea, to turn upon the inanimate matter of the underground, and reduce it to his will. ¹²⁾

「地下に眠る物質に挑みかかり、自己の意志に従わせること」それだけが彼の希うところである。彼は炭坑経営者として当然のことを考え、実行するのであるが、ここには、自然は征服すべきもの、そして、人間に奉仕すべきものとする支配と被支配の構造が認められる。自然は彼にとってそれ以上の意味は持ち得ない。こうした態度は“The will of man was the determining factor. Man was the arch-god of earth. His mind was obedient to serve his will. Man’s will was the absolute, the only absolute.”¹³⁾とする彼の理念から必然的に導かれる帰結と見てよい。

では合理的精神からなぜこのような帰結が生まれるのであろうか。それは合理主義的精神が専ら理性的判断に基づく認識法だからである。

理性的判断、いいかえれば、知的判断の特徴は判断する者とされる者との間に主体としての判断者と、客体としての被判断者、という関係が成立することである。裁く者と裁かれる者との関係と違ってよいが、この関係は、当然、裁く主体の方が優位に立つ関係といえる。従って、知的判断とは、究極的には、主体と客体の間に支配と被支配の関係を必然的に生むと見てよい。対象を知ることとは対象をコントロールする力を持つことでもあるからである。知的判断に基づく合理主義精神の権化たるGeraldが自然界に対して支配者としての意識を持つのはそのためである。

さらに、知的判断にはもう一つ特徴がある。それは、この認識法は対象についての分析的知識しか与えないという点である。しかも、それは因果律の観点からのみ眺めた現象についての知識である。ロレンスも述べているように、知的認識法に基づく太陽の姿とは、“a ball of blazing gas”¹⁴⁾となる。しかし、その認識法は人間の側の価値観から見た一方的知識しか与えてくれず、人間的顧慮を一切抜きにした対象自体の独自の価値を解明してくれるものではない。知的認識法の限界がここにある。

一方、ロレンスの肯定する、肉体、即ち、本能や直観による認識法はどうであろうか。知的認識法と大きく異なる点はやはり、主体と客体の関係が全く存在しない所にある。知的認識法とは異なり、この認識法は距離を置いて対象を眺めることはない。無距離の認識なので、そこには、主客の関係が存在する余地は皆無と見てよい。一瞬にして対象を丸ごと生きたまま把握する認識法といえる。そして、この血肉による知識は、知的認識法による知識が因果律に基づく現象に関する「分析知」であるのに対して、「全知」(knowledge in full)と称すべきものである。

以上見たように、様々な限界点と否定的側面を合わせもつ合理主義的精神であるが、最大の難点は、人間を支配者として自然界に敵対させるとこ

ろであろう。しかし、人間がいかにも万物の霊長を自任しようとも、人間は本来、自然の中で生まれ、育ち、そして、死してまた自然に帰って行く存在である。人間は自然の一部であるという厳然たる事実を否定することはできない。だとすれば、突きつめれば、人間を万物の長とせずにはおかない近代合理主義精神は、自然界における人間本来の位置を誤認させる危険な本質を持つ精神といえよう。

合理主義一色に染った現代は社会全体がその誤りを犯している。しかも、それに対し無自覚であるところに、ロレンスは緊迫した危機感を抱くのである。

5

合理主義精神は一貫してヨーロッパ・キリスト教文明を支えてきた精神的支柱であり、いわば、その文明の本質といってよい。従って、合理主義精神に対するロレンスの問題意識は単なる一時的現象に対する懸念ではなく、その文明全体にかかわる歴史的重みをもった問題である。それだけに、文明に対するロレンスの危機感は深く重いものだったに違いない。

金谷氏も指摘している通り、ロレンスにとって第一次世界大戦は単なる経済上の破綻でもなければ、政治上の破綻でもなかった。合理主義精神を支柱とするヨーロッパ・キリスト教文明そのものの破綻を意味した¹⁵⁾。彼が、先に引用した *Lady Chatterley's Lover* の冒頭で現代を「悲劇の時代」と呼んでいるのは、そのような意味においてである。

彼が何かに追われるかの如くメキシコ、オーストラリアといったまだ文明に毒されていない地方に逃避行を企てたり、古代エトルリア文明を憧憬するのも、文明の否定と密接なかわりがある。そうした土地や文明の人々は彼の理想とする、「血の意識」によってのみ知り得る認識の世界で生活していたと考えたからであった。

しかし果たして、メキシコやオーストラリア、そして古代エトルリア文明に彼の信じた理想郷があったかどうかは疑問である。また、行き過ぎた合理主義精神を否定し、それまで無視されていた

人間の肉体や本能の復権を促したことは意義があるとはいえ、肉体や本能の必要以上の強調はそれが妥当かどうかの判断は慎重を要する。しかし、合理主義精神の限界とその否定的側面を鋭く抉った見識の高さは異論の余地はなさそうである。そして、彼の文明批評は彼の生きた19世紀後半から20世紀初頭のみには通用することではなく、20世紀後半の現在においても、そのまま通用するものといえる。

しかも、もともとヨーロッパという一地方に勃興したキリスト教文明が、ギリシア、ローマ、エジプト、インド、中国等の幾多の文明の興亡史の中で、かつて例がない速度でその版図を広げ世界文明となっている現状を考える時、ロレンスの文明批評は世界的意義を持つといっても決して誇張にはならないであろう。

Notes

- 1) Peter Hodgson, *Science and Christianity* (Tokyo : Kinseido, 1993), p. 42.
- 2) D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover* (1928 ; rpt. Harmonds Worth : Penguin Books, 1974), p. 5.
- 3) D. H. Lawrence, "Morality and Novel." *Selected Literary Criticism*, ed. Anthony Beal (1956 ; rpt. London : Heinemann Educational Books, 1978), p.113.
- 4) 金谷展雄、『D. H. ロレンス論』(東京:南雲堂, 1988), p. 114.
- 5) D. H. Lawrence, *Women in Love* (1921 ; rpt. London : Willian Heinemann, 1971), p. 51.
- 6) Lawrence, *Women in Love*, p. 453.
- 7) Lawrence, *Women in Love*, p. 337.
- 8) Lawrence, *Women in Love*, p. 408.
- 9) D. H. Lawrence, "The Novel." *Phoenix II* , ed. Warren Roberts and Harry T. Moore (1968 ; rpt. Westford:Penguin Books, 1978), p. 227.
- 10) *Last Poems* 中の "Only Man" と題した詩の中でロレンスは動物と人間とを比較して次のようにうたっている。Only man can fall from God/Only man/No animal, no beast nor creeping thing / no cobra nor hyaena nor scorpion nor hideous

white ant/can slip entirely through the fingers of god/into the abyss of self-knowledge, knowledge of the self-apart-from-god.

D. H. Lawrence, "Last Poems." *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, ed. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts (1964 ; rpt. London: Heinemann, 1972), p. 701.

11) 宇宙の喪失とキリスト教二千年の歴史との関係をロレンスは次のように考えている。Now we have to get back the cosmos, and it can't be done

by a trick. The great range of responses that have fallen dead in us have to come to life again. It has taken two thousand years to kill them. D. H. Lawrence, *Apocalypse* (1931; rpt. Bungay : Penguin Books, 1981), p. 30.

12) Lawrence, *Women in Love*, p. 220.

13) Lawrence, *Women in Love*, p. 216.

14) Lawrence, *Apocalypse*, p. 27.

15) 金谷, 『D. H. ロレンス論』p. 10.